

# 検討結果報告書

地域コミュニティの担い手不足を克服し  
活性化を図るための検証

田原市地域コミュニティ活性化研究会  
(田原市地域コミュニティ連合会専門委員会)

平成31年3月

# 目次

1	はじめに	1
	地域コミュニティの担い手不足を克服し活性化を図るための5つの提言	2
2	モデル地域の選定とその内容	3
(1)	高松コミュニティ協議会 「爺ちゃん婆ちゃん喫茶」	3
ア	事業内容及び選定理由	3
イ	期待される効果	4
ウ	学生の募集	4
エ	学生の参加	4
オ	アンケート結果	5
カ	検証結果	7
キ	愛知大学の地域貢献事業について	8
(2)	若戸校区コミュニティ協議会 「子育て支援活動とInstagramを活用した地域情報発信」	9
ア	事業内容及び選定理由	9
イ	期待される効果	10
ウ	実施内容	10
エ	アンケート結果	11
オ	検証結果	12
3	地域コミュニティを活性化するための事例	14
(1)	活性化研究会が視察対象とした事例	14
	地域カフェを開催して認知症予防に取り組んでいる事例（常滑市）	14
(2)	市内の事例	17
ア	既存の活動に合わせて市民館を使用することでコミュニケーションの場を提供している事例（亀山コミュニティ協議会）	17
イ	地域の賑わいの創出と触れ合いの場とするため行事を復活させた事例（大草コミュニティ協議会）	17
(3)	市外の事例	18
ア	公共交通の空白地帯で移動手段の確保に取り組んでいる事例（静岡県掛川市）	18
イ	小学校と住民が一体となって地域振興に取り組んでいる事例（秋田県大館市）	18
4	おわりに	20

## 参考資料

地域コミュニティ活性化研究会の活動状況	21
1 検討経過	21
2 委員等の構成	22

# 1 はじめに

地域コミュニティ活性化研究会は、地域コミュニティ研究会（平成21年10月設置）が取り組んできた地域課題の整理と改善策等に関する報告を受け、「報告書に掲げる取組例の実践として、個別案件の調査・具体的提案等を行うことにより、市内の校区協議会、地区自治会等の活性化を図る」ことを目的に、地域コミュニティ連合会の専門委員会として平成23年度に発足しました。

これまでの活性化研究会では、

- ・平成23年度・24年度 ①住民参加の推進 ②地域活動の活性化 ③地域コミュニティと神社の関係整理・活用
- ・平成25年度 学校再編にかかるコミュニティ・校区制のあり方
- ・平成26年度 持続可能な自治会運営

と、各年度様々なテーマに取り組んできましたが、平成27年度・28年度の活性化研究会では、依然として残る「共通の課題」として「担い手不足」に焦点を当てて検討会議を重ね、活性化研究会での協議内容や活性化に取り組んでいる事例を踏まえて、新たな視点を持って、地域コミュニティの担い手不足を克服し、活性化を図るために「5つの提言」をまとめました。

今回の研究では、この「5つの提言」に係る具体的な事業をモデル事業に設定し、その事例の実証等を行うことにより、コミュニティ協議会や地区自治会等に対する「5つの提言」の具現化の可能性や効果を検証し、これからの地域コミュニティのあり方における提言の活用について検討を行いました。

## 地域コミュニティの担い手不足を克服し活性化を図るための5つの提言

地域コミュニティの担い手の確保・育成及び活動の活性化に向け、研究会での協議内容や活性化に取り組んでいる事例を踏まえ、従来の概念にとらわれない新たな視点を持って、次のとおり提言する。

### 提言1：若者の力・よそ者の視点を取り入れる

- 地元の若者（中学生から29歳くらいまでを想定）の発想力、行動力、ネットワークを取り入れる。
- よそ者（地域外の住民や企業、地域にない知識や技能を持つ者）の視点で、地元の気づかない地域の良さを発見し、地域課題の解決のヒントや方法を提案してもらい、地域コミュニティ活動の仲間とするきっかけとする。

### 提言2：担い手を確保・育成する

- 効果的な情報発信や短い時間からの参加等条件の工夫により、やる気のある人材が参加しやすい仕組みをつくる。
- 移住者や、若者、女性、高齢者等、様々な年齢層が能力や経験を活かせる場を提供する。
- 中学・高校生等の若者の地域活動への関りを促すことにより、地域への理解を深め、将来の担い手の育成につなげる。

### 提言3：地域で活動する多様な団体と連携する

- 教育機関をはじめ、趣味やスポーツ、子育て支援等特定の目的を持った地域組織、NPO、ボランティア、企業等との連携を探る。
- 地域コミュニティが、連携を通じて地域組織、NPO、ボランティア、企業等の運営や活動に貢献していること、役立ち得ることを知ってもらう。

### 提言4：地域課題について事業化を検討する

- 地域資源を活用した地域づくりや、子育て、高齢者見守り等の地域福祉活動等地域課題の解決に向け継続的に取り組んでいけるように、NPO法人化など事業化を検討する。
- 地域福祉や交流イベントなど地域活性化のため新たな財源確保に向けて、他の機関から補助金、交付金を獲得したり、クラウドファンディングなど個人の投資をインターネットで呼びかけるといった検討に着手する。

### 提言5：地域の人口減少に歯止めをかける

- 地域外、市外から若者が移住し定住できるよう、空き家紹介など、生活支援を検討する。
- 祭り、イベントなど地域資源を活かした活動を介して、若者や子育て世帯を迎えるなど、若い世代を迎え入れる地域コミュニティづくりを目指す。

## 2 モデル地域の選定とその内容

### (1) 高松コミュニティ協議会 「爺ちゃん婆ちゃん喫茶」

#### ア 事業内容及び選定理由

##### ■活動内容

爺ちゃん婆ちゃん喫茶（以下「喫茶という。」）とは、高松地域の一色集会場と新井集会場を拠点に活動している地域団体で、平成29年4月から活動が始まり毎月開催している。喫茶の参加者には、お茶・コーヒーなどの飲み物、手作りのお菓子や簡単な地域の料理（地元の農家さんから提供された野菜を使用）等を振舞っている。

現在は、高松町在住の柴田ひろ子さん・民生委員・ボランティアナース1名で運営しており、田原市社会福祉協議会からの年間3万円の補助で活動している。

参加者は集会場ごとに異なり、一色集会場には一色地域の方約20名、新井集会場には新井地域の方約10名が参加している。飲食だけでなく、日常の暮らしに関する講話やクリスマス会、愛知大学の落語研究会を招いて落語を披露してもらうなど、参加者の楽しみの場であり、ふれあいの場となっている。



喫茶の様子 愛知大学落語研究会による落語の披露

##### ■実施場所及び実施日

一色集会場 第2木曜・午後2時～4時

新井集会場 第4木曜・午後2時～4時 ※各会場毎月1回開催

##### ■対象

高松町在住の高齢者の方（年齢制限は特になし）

##### ■選定理由

喫茶は、高齢者の居場所を作ることを目的に活動が始まった。

そこに愛知大学の※学生地域貢献事業で学生に参加してもらうことにより、若者の力を取り入れ、喫茶の活性化を図るものである。

期待される効果として、ひとつは、喫茶に学生を呼び込むことで、若者の発想力、行動力を地域に取り入れることができる。

次に、若者と高齢者が交流することによって、学生側には、高齢者との接し方を学ぶ機会となり、地域活動へ参加するきっかけを作ることが



できる。また、喫茶参加者の高齢者には、普段の生活であまり関わる事ができない学生とコミュニケーションを取ることで、若者が知らない昔話やお年寄りの知恵を学生に伝えることができ、より充実した時間を過ごすことができる。

そして、充実した喫茶の運営を図るとともに、今後も継続・発展してこの喫茶を行うための地域の担い手の確保・育成につながる。

以上のことが「5つの提言」のうちの提言1、提言2及び提言4に係る効果検証が期待されることからこの活動をモデル事業とした。

※学生地域貢献事業：愛知大学地域政策学部の基本理念である「地域を見つめ、地域を生かす」を実践する活動。学生自らが実際に現場である地域社会に出て、さまざまな問題を発見し、その諸問題を解決する方策を考え出し、それを計画的に実行し、その遂行を通じて、地域を再生・創造していくことのできる「地域貢献力」を育てていくもの。（愛知大学HPから抜粋）

## イ 期待される効果

- 高齢者 学生とのふれあいを通して、普段関わりのない世代との交流ができ喫茶に参加することで充実した時間を過ごすことができる。
- 担い手 学生ボランティアに協力してもらうことで、活気が生まれ、喫茶に取り組む環境がより充実される。また、担い手の育成にもつながる。
- 学 生 喫茶の運営協力や、参加高齢者とコミュニケーションを取ることで、高齢者との接し方や地域活動への関心を高めることができる。また、地域活動を通して地域住民同士の横のつながりの大切さを学ぶことができる。

## ウ 学生の募集

愛知大学の学生地域貢献事業で参加者の募集を行った。

平成30年4月20日に事務局が愛知大学においてプレゼンを行い、その後4月27日から5月24日まで計3回同大学で学生の勧誘を実施し、地域政策学部の3年生2名と1年生3名、文学部の1年生1名の計6名の学生の参加を得た。



愛知大学で行われた地域貢献事業の説明の様子

## エ 学生の参加

学生は、6月から翌年1月まで計6回参加した。5回目以外は、高齢者と同じテーブルに着き、会話によるコミュニケーションを図る形で参加した。最初の2回は会話のみであったが、その後は、参加者が自分たちと一緒に楽しんでもらうような様々な催しを企画し、参加者からも好評であった。

6月：参加者と同じテーブルに加わってコミュニケーションを図った。

7月：参加者と同じテーブルに加わってコミュニケーションを図った。

10月：参加者皆が歌えるような曲を選んで歌詞カードと音源を作り、参加者と一緒に歌った。その後は、参加者と同じテーブルに加わってコミュニケーションを図った。



参加者と一緒に歌を歌う学生達

11月：手作りした「いもきんとん」を参加者に振舞った。その後参加者と同じテーブルに加わってコミュニケーションを図った。

12月：クリスマス会のレクリエーションとしてハンドベルを演奏した。また、手作りしたビンゴ用紙(A4サイズの田原市で取れる食材や、これまでの喫茶で出された食べ物が書かれたもの)を使ってビンゴゲームを行った。その後は、参加者と一緒に赤羽根町在住の作詞・作曲家の安藤氏の歌を聞いた。



クリスマス会でハンドベルの演奏を披露する学生達

1月：主催者から高松町出身のキルト作家故近藤真弓さんの活躍とその作品の紹介を受け、その後は、参加者と同じテーブルに加わってコミュニケーションを図った。

## オ アンケート結果

①大学生が地域の活動に関わることについて、どのように考えますか。

- ・有効である 11人
- ・有効ではない 0人
- ・その他(未回答含む) 1人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・若者の力を取り入れることは大変有効。
- ・地域の結びつきが希薄になる中で、地域の高齢者が若者と交流することにより行動範囲が広がり、生きがい作りに有効。
- ・運営側の問題としてボランティアの人数不足が考えられるが、学生が手伝ってくれればありがたい。
- ・こうした事業は、ボランティア活動への参加者がいなければ成り立ちづらい。若い世代の本事業への参加経験は、将来こうしたボランティア活動の担い手としての可能性を期待させる。
- ・若者の新しい考え方は、地域にとって良い刺激になる。
- ・爺ちゃん婆ちゃん喫茶の参加者は、「学生が来てくれる」「話しかけてくれる」「話を聞いてくれる」ことに喜びを感じていることが伺えた。参加

者が楽しみに出向いてくる取組となっているため、有効であると感じた。

- ・大学生が地域活動に関わることで、新しい考え方が提供され、マンネリ化しやすい活動が活性化される。

②実施主体や運営方法について、御自身の地域の活動の参考になりましたか。

- ・はい 7人
- ・いいえ 1人
- ・その他（未回答含む）4人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・市民館に多くの人が集い、憩いの場となるきっかけになる。
- ・地元で「ひなたぼっこ」という会をつくって活動しているので、運営の仕方等が参考になった。
- ・お茶を飲む会合であるため、スタートが入りやすい。
- ・家から出る良いきっかけになり、人と話すことにより認知症予防になると思うが、運営するスタッフを見つけ出すことが難しそう。

③この取組は、御自身の地域の課題解決につながる活動だと思いますか。

- ・はい 6人
- ・いいえ 1人
- ・その他（未回答含む）5人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・少子高齢化が加速し、地域のつながりの機会が減少していく中で有効な取組と考える。
- ・課題解決とまではならないと思うが、高齢者の活動範囲が広がり、情報や知識の交換ができるので、意識改革ができると思う。
- ・老人会への参加が少なくなっているのが現状であるので、このような活動への参加は良いと思う。
- ・根本的に生涯現役地区では、参加者、ボランティア共に参加が見込まれない。
- ・全く知らない人を受け入れがたい地域性がある。
- ・自分の地域でも少人数で月1回ほど高齢者が市民館に集まって談話する場があるが、指導者がいなくなるため今年度で活動が終了する。

④この取組を御自身の地域に取り入れてみたいと思いますか。

- ・取り入れてみたい 6人
- ・取り入れは難しい 2人
- ・その他（未回答含む）4人

また、実施することはできると思いますか。

- ・実施できる 1人
- ・実施は難しい 8人
- ・その他（未回答含む）3人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・当地域は協議会長を含め、自治会長が2年で交代するため、骨子案を策定することに十分な時間を掛けることができず、目標（考え方）を共有する



ことが容易ではない。

- ・自分の地域は自分の考えではなく、友達の考えに左右される傾向が強いため、参加する人数が定まらない。
- ・運営スタッフ（リーダー、人材）が集まらないのではないかと思う。
- ・現在活動している趣味のグループとの調整が必要。

## カ 検証結果

主催者は、地域のつながりや交流を深めることを意識してこの活動を開始した。

例えば、喫茶で使うコーヒーカップを作ってくれたのも、喫茶の暖簾に文字を書いてくれたのも地元の人である。クリスマス会のカードは、地元の小学6年生の親がカードを作り、6年生が文字を書き、それを参加者に渡すというやり方をしている。

このような形で、この喫茶の参加者であるおばあちゃん達を中心に、地域のつながりや交流が形成されている。

この喫茶の参加者は、元気なおばあちゃん達であり、学生は、主催者の希望に沿って、参加者のお世話をするボランティアとしてではなく、参加者と一緒に自分たちも楽しむ立場で参加している。様々な企画も、参加者と学生が一緒になって楽しめるよう、主催者と学生が調整して実施している。

「いもきんとん」作りでは、参加者と一緒に作るのではなく、自分たちが作って参加者に渡す方法を選択した。どのように接すれば参加者が喜んでくれるか考えて参加している。

本モデル事業は、「提言1：若者の力・よそ者の視点を取り入れる」、「提言2：担い手を確保・育成する」、「提言4：地域課題について事業化を検討する」の効果を検証するものである。

喫茶に学生が参加したことにより、主催者は運営の幅が広がり、参加者は普段あまり接することのない若者と交流することができ、新しい刺激を受けている様子が伺われた。

参加者、主催者、学生が、互いに良い関係で喫茶の運営が行われている。委員の「地域の結びつきが希薄になる中で、地域の高齢者が若者と交流することにより行動範囲が広がり、生きがい作りに有効」、「大学生が地域活動に関わることで、新しい考え方が提供され、マンネリ化しやすい活動が活性化される」という意見があったことから「提言1」に関しては、大変効果があったと言える。

一方、学生においても、高齢者との接し方や、自らが喫茶の企画を行うことで、運営側との調整の必要性や、運営する立場で物事を考えるなど、地域貢献活動の糧とすることができた。「提言2」に関しても、参加した学生が、将来的に同じような活動の担い手となる可能性を期待させるなど効果があるものと考えられる。

また、今回モデル事業に参加した学生の一部は、次年度の活動に向けて継続の意思を示しており、「提言4」に関しても学生参加の事業化の可能性は見られた。

一方で委員の意見からは、何らかの形で若者が地域活動に関わる仕組みをつくることは、地域の活性化に有効な手段だとの認識は持っているものの、地域での実施は容易ではないとの意見があり、アンケート結果からも、有効性は認めるものの、自身の地域に取り入れることは難しいとの考えは多く、それらの意見の中には、人材の確保ができないというものが多い。誰が実施していくかという部分が最も大きな課題であり、この点が継続して活動を行うことにも強く影響してくる。

地域活動に学生が参加することは、参加者、主催者及び学生にも有効なことだと考えられるが、そもそもの事業の立上げをどのような形で実行するかは、なお課題となっている。

## キ 愛知大学の地域貢献事業について

本活性化研究会のオブザーバーである、愛知大学の鈴木誠教授からコメントをいただきましたのでここに掲載します。

### 愛知大学の地域貢献事業について

愛知大学教授  
愛知大学地域政策学センター長  
鈴木 誠

愛知大学地域政策学部主催の学生地域貢献事業は、「地域貢献」という名称を掲げています。ただ、その内実は「地域に学び、人々が抱える課題や夢を学ばせていただく」、「課題の解決や夢の実現に向けた活動の輪に参加協力させていただく」という体験段階にあるものが、まだまだ多いというのが実情です。

田原市の皆さんにお世話になった「爺ちゃん婆ちゃん喫茶」事業も、その域を出ない内容から始まったかもしれません。しかし、学生たちは、皆さんとの交流を深める中で、徐々に情報収集し、自ら考え、悩み、そして問題意識を固めながら自分たちが取り組みたいことをみなさんに提案したり、相談するようになったのではないかと思います。

その結果、学生たちは大学に戻り、何度も会議を重ねながら、田原市の各地域コミュニティ協議会が進めるまちづくり推進計画をはじめとする市独自のコミュニティ政策の重要性を学び直すことから始めたようです。そして、「爺ちゃん婆ちゃん喫茶」事業のような健康寿命の延伸につながる親睦事業は、だれもが参加可能なコミュニティ活動として大切であることを学び、来年度も参加し継続したいと強い希望を抱いていると聞いています。

平成30年度は本学の学生がご一緒しましたが、今後は、地元の高校生や中学生、田原市内の他地区に住む若者たちが本学の学生たちと協働し、地元の高齢者や社会福祉協議会の皆さんと交流しながら新たなイベント企画を始めるかもしれません。また、他のコミュニティ協議会の皆さんとの新たなコラボレーションを学生たちが自主的にお願いにあがるかもしれません。

平成30年度は、本学部の地域貢献事業において、20団体が誕生し、370名ほどの学生が参加して、浜松から名古屋に至る広い地域のまちづくり活動、教育活動、コミュニティ事業に参加してきました。来年度は、今年度以上に参加学生が増える見込みです。したがって、田原市のコミュニティ活性化のためにも、今年度以上に緊密な連携事業を企画し、生み出せるよう、地域コミュニティ協議会の皆さんにはご支援とご協力をぜひお願いしたいと思います。

## (2) 若戸校区コミュニティ協議会 「子育て支援活動とInstagramを活用した地域情報発信」

### ア 事業内容及び選定理由

#### ■活動内容

若戸校区コミュニティ協議会の子育て支援活動として、未就園児とその保護者を対象に若戸市民館において、年1回「子育て支援教室」として親子※1リトミック教室などを行い、親と子の交流、未就園児同士のふれあい、母親同士の交流の場として開催している。

また、情報発信は、毎月2回の回覧や、市民館の掲示板、年2回発行する会報誌しかなく、地域活動の情報発信や参加者募集に苦勞している。

※1リトミック：音楽の基礎とともに集中力、判断力、想像力、感性を養う音楽遊びによる情操教育

#### ■実施場所及び実施日

若戸市民館 不定期開催

#### ■対象

若戸校区在住の未就園児から小学生までの親子

#### ■選定理由

子育て支援活動の回数を増やし、新たな子育て支援活動を企画・立案・運営し、市民館を拠点とした地域内の子育て支援環境の充実を図ることにより、地域で活動する多様な団体と連携することが期待できる。そして、未就園児から小学生の子どもたちにとって貴重な体験ができるきっかけづくりを仕掛けるとともに、子育て中の母親同士の交流の場づくりに取り組むことで、若者や子育て世帯を迎える環境を作ることができる。

また、情報発信においては、※2 Instagramを活用することで、子育て支援活動を始め、様々な手法でコミュニティ活動を地域住民へPRすることが



親子リトミックの様子

できる。

以上のことが、先に述べた「5つの提言」のうち、提言2及び提言3に係る効果検証が期待されることからこの活動をモデル事業とした。

※2インスタグラム：スマートフォンなどで撮影した写真に画像編集を加えて共有するSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）のひとつ

## イ 期待される効果

### ■子育て支援活動

- ・子育て支援活動を市民館が拠点となり実施することで、地域で活動する多様な団体と連携することができる。
- ・子育て中の母親同士のネットワークが生まれ、地域内のつながりが強くなる。
- ・※3 コーディネーショントレーニングを導入することで、子どもの体力・運動能力が向上し、地域コミュニティが力となり子どもの成長を支援することができる。

※3 コーディネーショントレーニング：運動を早く学習することができるようにするための学ぶ力を得ることを最大の目的としたトレーニング

### ■インスタグラム

- ・若者世代に限らず、40代以上のインスタ利用者にも周知でき、幅広い年代にPR可能。
- ・コミュニティ協議会の会報誌だけでは紹介することのできない活動をよりタイムリーに地域住民に周知できる。
- ・スマホでいつでもコミュニティ協議会の情報を見ることができるので、閲覧板を回した後でもいつでも見ることができる。

## ウ 実施内容

若戸市民館において、5月から翌年2月までの間に、未就園児の親子を対象とした子育て支援教室として親子リトミックを計5回開催した。教室の後は、お茶とお菓子を用意し、参加者同士で会話できるように「アトカフェ」という場を設け、参加者同士の交流も行った。参加者は1回目が13組、2回目が23組、3回目が19組、4回目が9組、5回目が5組であった。

また、同じく若戸市民館において、3歳から6歳児の親子、小学1年生から3年生、小学4年生から6年生を対象に運動教室としてコーディネーショントレーニングを7月から翌年2月まで計7回開催した。1回目は76人（うち親25人）の参加があったが、その後は毎回同じ顔ぶれの20名程度（うち親8名程度）が参加する状況となっている。

インスタグラムの活用については、当初の2回と5回目の親子リトミック教室で案内に活用され、その他は親子リトミック教室の開催の実績報告と他の市民館行事等の案内や活動報告にも活用されている。

## エ アンケート結果

①市民館を拠点とした地域の子育て支援活動について、地域の担い手育成につながる活動だと思いますか。

- ・はい 8人
- ・いいえ 0人
- ・その他（未回答含む）4人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・若いお母さん方にとって、子育てという共通の立場の仲間ができるのはとても心強いと思う。将来的には、支援する立場の人材として育つ可能性も期待できる。
- ・核家族化が進む中で母親同士の交流の場が作られ、情報交換等ができるので、子育て支援には有効だと思う。担い手の育成にも役立つのでは。
- ・保護者のつながりができるという点では有効と思うが、地域の担い手育成につながる活動となるとまだ達していないと感じる。子育て支援活動を地域の方で行っていくのであれば、まずは保育士や保健師、看護師などを退職した方などのリストアップをするなど、人材掘り起こしが必要ではないか。
- ・市民館を拠点とすることで安心して集まりやすい。

②市民館を拠点とした地域の子育て支援活動について、御自身の地域に取り入れてみたいと思いますか。

- ・取り入れてみたい 5人
- ・取り入れは難しい 1人
- ・その他（未回答含む）6人

また、実施することはできると思いますか。

- ・実施できる 2人
- ・実施は難しい 1人
- ・その他（未回答含む）9人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・現在実施している子育て支援活動をより充実させることが期待できる。
- ・自分の地域は住宅団地が多く、隣近所の連携が希薄なため、母親に安心感を与えるためにも、どんな形でも子育て支援は必要だと思う。
- ・これから必要とされることである。
- ・既に月1回実施している。

③インスタグラムによる情報発信について、御自身の地域では有効な手段だと思いますか。

- ・はい 9人
- ・いいえ 1人
- ・その他（未回答含む）2人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・発信内容、発信対象者によっては非常に有効だと思う。
- ・若い人たちは、パソコン、スマホの情報を頼りに生きている人が多いので有効だと思う。

- ・校区を越えた情報提供が可能。
- ・若いお母さんはこういった情報の取り込みが早く、情報のやりとりもしやすいと思う。
- ・運営スタッフがいない。

④インスタグラムによる情報発信について、御自身の地域に取り入れてみたいと思いますか。

- ・取り入れてみたい 4人
- ・取り入れは難しい 2人
- ・その他（未回答含む）6人

また、実施することはできると思いますか。

- ・実施できる 3人
- ・実施は難しい 0人
- ・その他（未回答含む）9人

上記の回答を選んだ主な理由

- ・当地区はメール配信により情報発信を行っているが、若い世代にはインスタグラムの方がより有効だと思われる。
- ・自分の地域はホームページを開設して地域情報を発信しているので、その一環としてインスタグラムも発信できるのではないか。
- ・継続して行っていくのは難しいと思う。
- ・インスタグラムは個人で行うもので、地域での構築には抵抗がある。

## オ 検証結果

本モデル事業は、「提言2：担い手を確保・育成する」、「提言3：地域で活動する多様な団体と連携する」の効果を検証するものである。委員のアンケート結果は、子育て支援活動においては、「市民館を拠点とすることで集まりやすい」、また、インスタグラムによる発信においては、「若い人たちは、パソコン、スマホの情報を頼りに生きている人が多いので有効だと思う」といった双方とも有効であるとの意見が多い。

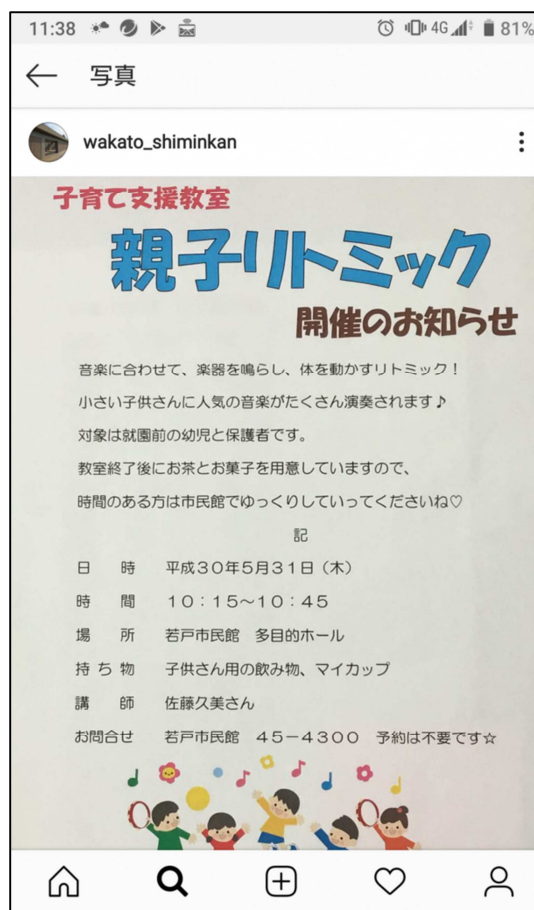
子育て支援教室は、昨年度までは年1回の開催だったのを今年度は5回実施することとした。参加者からは「親子で楽しく遊ぶことができた」、「もっと頻繁に市民館が開放されるとうれしい」、「同じ年の子ども達、ママ達との交流も楽しかった」等の前向きな意見が寄せられており、子ども同士、親同士の交流の場ともなっている。また、参加者の「たくさんの友達に会うことができ良かった」との意見もあり、それを楽しみに参加する方もいるようである。運動教室については、田原市に指導資格のある講師を紹介してもらい、今年度から新たに取組を始めた。参加者の感想には「運動能力が上がるポイントが的確に指示されていて良かった」、「堅苦しい感じではなく、遊びながら自然と学べて動けるところが良かった」等の意見があった。これについては、普段しない動きで筋肉を刺激することで運動学習能力を高めることを主眼に置いているため、子どものニーズにやや合致しない面もあるためか毎回同じ参加者となっているようであるが、参加者が継続して取り組むことでトレーニングの良さを感得し、それを他に広めることで、参加者を増やすことにつながるものと思

われる。

また、効果的な情報発信のひとつとしてInstagramによるお知らせに取り組んだ。フォロワーは11月末時点で56人であり、この中で若戸地域の方の数は不明であるが、1回目の親子リトミックの案内の「いいね!」は5件だったが、2回目には17件になっていることから、閲覧者が増えている状況が伺える。若戸校区コミュニティ協議会が実施する子育て支援活動が地域で定着してきているため、そのお知らせを行うツールとして参加者が認識すれば、委員の「若いお母さんはこういった情報の取り込みが早く、情報のやりとりもしやすいと思う」との意見にもあるように「提言2」に関して有効な活用が見込まれる。ただし、現在は、Instagramの発信と平行して、次回の開催案内のチラシを参加者に渡す、保育園で配る、市民館にチラシを貼るといった複合的な情報発信を行っている。

これらのことから、本取組が小さなこどものいるお母さんたちにとって、参加しやすくなる工夫がされており、実際に参加者もあることから、「提言2」に関して一定の効果があったことが検証できた。また、委員の意見にもあるように、保育士や保健師、看護師などを退職した方などのリストアップをするなどして人材の掘り起こしを行い、その人たちが経験を活かせる場となれば、更に「提言2」につながっていくものと考えられる。

親子リトミックの講師は、田原市が実施する市民カレッジのボランティア講師の方で、コーディネーショントレーニングの講師は、市内の指導資格者を招いて実施している。「提言3」については、講師を紹介してもらうという形で田原市との連携が取られ、事業が実施されていることから効果も検証されている。しかし、主催者としては、双方とも次年度も行っていきたい希望があるが、コーディネーショントレーニングの講師は、個人的にボランティアで行っているため、引き続き講師を引き受けてもらえるかという不安を抱えており、安定して開催をするためには、他にも実施が可能な講師の確保が課題となっている。



スマートフォンのInstagramの画面

### 3 地域コミュニティを活性化するための事例

#### (1) 活性化研究会が視察対象とした事例

##### ●視察先及び日程等

◇視察先 よろまいせいかい（愛知県常滑市 青海公民館）

◇対応者 オレンジ会 都築会長・長屋氏（事務局）

常滑市高齢介護課 山口主査・中川主事

オレンジ会とは

○地域の人と認知症の人が一緒に地域で暮らしていけるように、認知症に関心のある方や認知症の予防に取り組む方、認知症の疑いが見られる方が一緒に参加できる活動を行うボランティア団体

○平成28年5月結成

○会員は認知症ボランティア養成講座修了者

○会費は年800円（ボランティア活動保険料含む）

○会長1名、副会長1名、会計2名、事務局1名

○会員数44名、30代～80代で構成（主な活動の中心は65歳以上）

○主な活動は、地域カフェよろまいせいかい・よろまいなんりょうの開催、イベントへの参加（ひとり歩き高齢者捜索訓練・おれんじみーていんぐ・介護予防フェス）

◇日 程 平成30年11月8日（木）午前10時00分～午後0時00分

◇テーマ 地域カフェの取組について、参考事例を研修し、本市における地域カフェの取組方法について検討する。

①常滑市の地域カフェの取組について

②オレンジ会（地域カフェ運営団体）の活動について

③常滑市の地域カフェへの支援等について

◇参加者 ・田原市地域コミュニティ活性化研究会 委員7名

・事務局 総務課2名 計9名



##### ●オレンジ会の取組

○平成28年9月、よろまいなんりょう開始（常滑市南陵公民館）

○平成28年11月 よろまいせいかい開始（常滑市青海公民館）

○健康とくらしの調査より、青海地区と南陵地区の認知機能低下リスクが高いという結果があり、それを踏まえて地区の市民センターを利用して通いの場所を作るため地域カフェが始まる。

○地域の人誰でも参加でき、認知症や認知症予防に関心のある方、不安のある



- 人に青海・南陵地区に地域カフェを開き、認知症予防の企画を行う。
- 各会場毎月1回地域カフェを開催。相談、脳トレ、本日の企画など
    - 【よろまいせいかい】毎月第2木曜日、10時～11時45分
    - 【よろまいなんりょう】毎月第3金曜日、10時～11時45分
  - 各地区の通いの場所や交流の場となること、認知症予防や進行を遅らせる手助けとなること、ボランティアの活動の場となるなどの効果が期待される。
  - 地域カフェ立ち上げ当時、機材の購入費を確保するため「パチンコ協会助成金（企業の助成金）」を活用
  - 参加者から300円を集金、そこからコーヒー代やお菓子代に充当
  - ※フードバンク制度を活用して、企業やスーパーなどでいらなくなった食品を参加者に配布している。
    - ※フードバンク制度：「食料銀行」を意味する社会福祉活動のことで、まだ食べられるのに様々な理由で処分されてしまう食品（賞味期限が近いなど）を福祉施設や団体に配布する制度

## ●常滑市の地域カフェ

- 市内7箇所で地域カフェを開催。オレンジ会のほかにNPO法人やデイサービスなど様々な団体が地域カフェを運営している。
- 毎月の広報とこなめで地域カフェの開催をPRして参加者を募集している。
- 地域カフェへの市からの助成金として、「常滑市認知症カフェ支援事業」
  - 講師代、会場費、相談員、消耗品費などが助成の対象
  - 助成金全体で約600,000円（※7つの地域カフェに配分）



### 地域カフェのご案内

【参考】  
広報とこなめ 10月号掲載

	日時	場所	対象	内容	参加費	問合せ
よろまいせいかい (予約不要)	10月11日(木) 10:00～11:45 (毎月第2木曜日)	青海公民館 ふれあいホール	どなたでも	「心をのぞいて」(妙楽院住職 酒井眞弘さん)	300円 (飲み物・お菓子代)	北・中部高齢者 相談支援センター ☎43-0662
カフェらくねこ (予約可)	10月12日(金) 14:00～15:30 (毎月第2金曜日)	キッチン& カフェ楽猫 (飛香台 2丁目1-4)	認知症に関する相談がある人	認知症に関する相談を専門職がお聞きします。	500円 (喫茶のドリンク代)	北・中部高齢者 相談支援センター ☎43-0662
カフェあかり (予約不要)	10月10日(水) 13:30～15:30 (毎月第2水曜日)	街かどサロン きらり (塩田町1丁目 155)	どなたでも	風邪を予防しよう(常滑市民病 院牧野みゆきさん)	500円 (喫茶のドリンク・ケーキ代)	NPO法人あかり ☎35-4189
よろまいなんりょう (予約不要)	10月19日(金) 10:00～11:45 (毎月第3金曜日)	南陵公民館 ふれあいホール	どなたでも	いきいきGOGO ～脳若グループ対抗～	300円 (飲み物・お菓子代)	南部高齢者相談 支援センター ☎34-7128
カフェまえやま (予約不要)	10月21日(日) 14:00～15:30 (毎月第3日曜日)	デイサービス おいなあとこ なめ(金山宇 大曾110-1)	どなたでも	秋祭り ～出店をしよう～	300円 (飲み物・お菓子代)	デイサービスおい なあとこなめ ☎43-3080
カフェ常滑屋 (予約不要)	10月16日(火) 14:00～15:30 (毎月第3火曜日)	常滑屋 (栄町3丁目 111)	認知症の人を介護する家族	認知症の人を介護する家族が集い楽しむカフェ (認知症フォーラム.com掲載)	500円 (喫茶のドリンク代)	常滑屋 ☎35-0470
オニカフェ (予約不要)	10月24日(水) 13:30～15:00 (毎月第4水曜日)	とこなめ市民 交流センター	どなたでも	介護家族から体験談を聞いて認知症の理解を深めよう	200円	北・中部高齢者 相談支援センター ☎43-0662



## ●考察・まとめ

常滑市の地域カフェは、「オレンジ会」という地域活動団体をはじめ「NPO法人あかり」「デイサービスおいなあとこなめ」「社会福祉法人来光会しろやま」「社会福祉協議会」など様々な団体がそれぞれの立場を活かして地域カフェを展開している。

オレンジ会の地域カフェの開催に当たっては、毎回高齢者福祉施設の職員がスタッフとして参加し、認知症予防の運動等を行っている。地域で活動する団体と上手く協働して地域カフェが運営されている。また、運営方法をみると、会員数が40名弱おり、その中で無理なく地域カフェに出られる人が運営して、上手く地域カフェが回っているように感じられた。中でもオレンジ会の事務局でもあり、常滑市南部地域包括支援センターで勤務している長屋さんの存在が大きいですが、視察した活動の様子を見ると、長屋さん以外のスタッフで司会や受付、記録撮影、参加者の対応など役割分担がされ、やる気のある人材が参加しやすい仕組みが作られており、担い手の確保と育成が図られている。

こうした手法を田原市で取り入れることを想定すると、市民館や地区集会所などを拠点に活動することは十分に可能だと考えられる。その際に、オレンジ会の長屋さんのような中心となる存在も必要だが、活動に協力する担い手を確保することが重要で、市や地域コミュニティ団体、福祉関係団体などの関わり方を考えていく必要がある。

## (2) 市内の事例

### ア 既存の活動に合わせて市民館を使用することでコミュニケーションの場を提供している事例（亀山コミュニティ協議会）

#### ■コミュニティ喫茶「やっとかめ」

- ・平成30年6月28日、亀山市民館においてコミュニティ喫茶「やっとかめ」オープン。毎月第4木曜日10:00から16:00開催。飲物（コーヒー、紅茶、お茶等）は全て無料。おやつは1つ100円。お菓子や食事を持ち寄っても可。
- ・渥美福寿園高齢者支援センターが、毎月第2第4木曜日に高齢者を対象とした閉じこもり予防教室「にこにこ会」を亀山市民館で開催している。それに合わせて「やっとかめ」を開催することにより、「にこにこ会」の参加者が自然に「やっとかめ」に立ち寄っているよう配慮されている。
- ・「にこにこ会」参加者以外にも近所の方や市民館に立ち寄ったついでに利用する方もあり、主に高齢者同士のコミュニケーションの場として活用されている。



### イ 地域の賑わいの創出と触れ合いの場とするため行事を復活させた事例（大草コミュニティ協議会）

#### ■盆踊り大会

- ・大草地区に住む40歳前後の有志が中心となって企画・立案し、「田原市市民活動チャレンジ支援補助金」の補助を受け、20年ぶりに盆踊りを復活させた。復活第1回目は、平成29年7月29日（土）大草市民館駐車場にて開催。盆踊り当日は、約250名（大草地区の人口の約6分の1）の参加があった。
- ・地域の賑わいの創出と住民の触れ合いの場とするとともに、男女の出会いの場となって婚活にもつながるよう、他地域からも参加してもらえようとする楽しい場とすることを目標に掲げている。



### (3) 市外の事例

#### ア 公共交通の空白地帯で移動手段の確保に取り組んでいる事例（静岡県掛川市）

##### ■中地区まちづくり協議会

- ・平成28年1月31日に設立された協議会で、地区ビジョンは「伝統・文化・自然を守り安心して暮らせる地区」。設立時の人口は2,054人、世帯数は765世帯。

##### 【地域支援車の運行】

- ・当地区は平成28年に路線バスが利用者減少を理由に撤退し、公共交通の空白地域となったため、住民同士の助け合いによる解決策として、地域住民を送迎する「生活支援車」の運行を平成30年6月から始めた。道路運送法の公共交通空白地有償運送で、5人乗りの乗用車を利用者の申込を受けて走らせる。運転手は国の認定講習を受けた住民8人が交代で務める。利用者は会員制で、半年間で3,000円の会費が必要。利用時間は平日の午前9時から午後5時までの間で、事務局に連絡すると支援車が自宅に来て病院などの既定の10箇所の目的地まで運んでもらえる。帰路の送迎にも対応する。
- ・乗車料金は中地区コミュニティ防災センターを基点に1回200円から600円で、運転手には1回の乗車で500円程度の報酬が支払われる。



掛川市「まちづくりの仲間を見つけるガイドブック-地区まちづくり協議会編-」より

※公共交通空白地有償運送：バス等の公共交通が不十分な地域で、NPO法人や社会福祉協議会が地域住民に提供する運送サービス

#### イ 小学校と住民が一体となって地域振興に取り組んでいる事例（秋田県大館市）

##### ■釈迦内サンフラワープロジェクト実行委員会

- ・人口約8,000人が住む釈迦内まちづくり協議会が運営主体となり、実行組織として釈迦内サンフラワープロジェクト実行委員会が事務局及び事業推進を図っている。学校、企業、農家がそれぞれ役割を担い、有機的連携のもと事業目的の達成を図っている。平成22年度に当時の4年生が取り組んだ「ひまわり油大作戦」が東北経済産業局のコンテストで大賞を受賞したのをきっかけに実行委員会が誕生した。

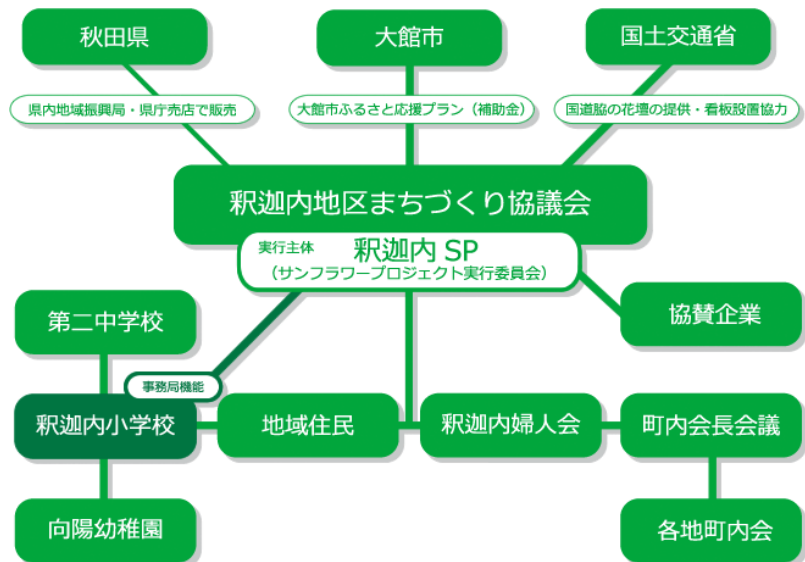
##### 【ひまわり活動】

- ・プロジェクトの目的は、子どもたちと地域の人たちが協力して「釈迦内＝ひまわり」を地域ブランドとして再構築していくことであり、それを地域振興や観光振

興につなげるという狙いもある。人口減少が進む中、子どもたちが将来、この地で誇りと希望を持って暮らしていけるよう、人材づくりと地域づくりに大人が主体的に関わろうとする熱い思いがある。

- ・ひまわり活動は、地域の方から遊休農地を借り、そこに子どもたちが、地域の大人の手を借りながらひまわりの種を植える。また、子どもたちが「一戸一ひまわり運動」と称して、ひまわりの種を各家庭で顔を合わせてプレゼントし、家庭毎に植えてもらっている。8月には、満開のひまわり畑にやぐらを建ててフェスティバルを開催する。8月下旬には、子どもたちと地域の人たちが一緒に刈り取りを行う。

### 釈迦内サンフラワープロジェクト実行委員会 組織図



釈迦内サンフラワープロジェクトHPより

- ・ひまわり活動の成功や失敗を通して、子どもたちには教科書では学べないたくさんの学びの場となる。また、大人が一生懸命働いている姿を見て、感謝の気持ちや将来の目指す姿を持つことにつながる。一方、大人は、子どもたちをただ手伝うのではなく、地域活性化をするという意識で活動している。ひまわりアイスの開発や搾油した後のカスの活用等、ひまわりを中心とした活性化のため、様々な分野の方が得意なことを持ち寄って、できることをできるときに取り組むことで、無理のない、長続きする仕組みを作っている。

## 4 おわりに

若者が地域の活動に参加することについては、いろいろな効果が得られることが検証されました。また、地域を活性化するための活動を行うに当たっては、やる気のある人材が参加しやすい仕組みを作ることが参加者の確保に有効であるとの結果が得られました。

若者に地域の活動に参加してもらう場合は、今回の高松のモデル事業のように他から呼び込む場合と、大草コミュニティ協議会の事例のように自身の地域の人に参加してもらう場合とが考えられます。今回の検証結果から、大学生の参加が得られた場合は、特に「提言1」について大きな効果が期待できます。また、「提言4」についても可能性が見られます。ただし、「提言2」に関しては、自身の地域の担い手の確保・育成を考えるのであれば、モデル事業のケースよりも大草コミュニティ協議会のケースの方が将来性を感じさせるものと考えます。

一方、若戸のモデル事業からは、「提言2」及び「提言3」に関して一定の効果が検証できました。事業に参加する人を確保する場合には、参加しやすい仕組みづくりが必要であり、様々な人が経験を活かせる場の提供も重要です。また、他の団体等と連携することは、それによって事業を行うことができたり、充実させることにつながります。自身の地域で取り組む場合には、そのような視点で取り掛かるとモデル事業で得られた効果が期待できるものと思われま

す。ただし、いずれの場合もその土台作りが重要であり、どのように事業を立ち上げ、また、継続させていくかが課題となっています。

# 参 考 資 料

## 地域コミュニティ活性化研究会の活動状況

### 1 検討経過

第1回	議 題
平成29年8月8日(火) 13:57~16:03 【場所】田原市役所 【出席】委員等11名	<ul style="list-style-type: none"> <li>活性化研究会の進め方</li> <li>委員自己紹介</li> <li>意見交換</li> </ul>
第2回	議 題
平成30年3月9日(金) 13:52~15:07 【場所】田原市役所 【出席】委員等9名	<ul style="list-style-type: none"> <li>前回の検討経過</li> <li>平成30年度に取り組むモデル地域(案)について</li> <li>意見交換</li> </ul>
第3回	議 題
平成30年6月13日(水) 13:52~15:21 【場所】田原市役所 【出席】委員等12名	<ul style="list-style-type: none"> <li>前回の検討経過</li> <li>平成30年度に取り組むモデル地域について</li> <li>意見交換</li> <li>関連情報</li> </ul>
モデル事業見学	内 容
平成30年7月12日(木) 10:15~10:45 【場所】若戸市民館 【出席】委員7名 14:00~15:30 【場所】高松町一色集会所 【出席】委員7名	<ul style="list-style-type: none"> <li>親子リトミックの見学</li> <li>爺ちゃん婆ちゃん喫茶の見学</li> </ul>
第4回(視察)	内 容
平成30年11月8日(木) 10:00~12:00 【場所】常滑市青海公民館 【出席】委員7名	<ul style="list-style-type: none"> <li>常滑市の地域カフェの取組について</li> <li>オレンジ会(地域カフェ運営団体)の活動について</li> <li>常滑市の地域カフェへの支援等について</li> </ul>
第5回	議 題
平成30年12月4日(火) 14:00~16:07 【場所】田原市役所 【出席】委員等10名	<ul style="list-style-type: none"> <li>第3回の検討経過</li> <li>視察研修報告</li> <li>検討結果報告書(案)の構成概要</li> <li>意見交換</li> </ul>
第6回	議 題
平成31年2月19日(火) 14:00~15:17 【場所】田原市役所 【出席】委員等11名	<ul style="list-style-type: none"> <li>前回の検討経過</li> <li>検討結果報告書(案)の修正概要</li> <li>次年度以降の取組について</li> <li>意見交換</li> </ul>

## 2 委員等の構成

### 地域コミュニティ活性化研究会名簿

(平成31年3月)

	役職	氏名	役職	備考
1	委員長	中尾利之	中山校区コミュニティ協議会会長 (連合会副会長)	■代表役員 ◇農村部
2	副委員長	玉越宏利	若戸校区コミュニティ協議会会長 (連合会副会長兼会計)	■代表役員 ◇農村部
3	委員	寺田幸弘	大草コミュニティ協議会会長	◇農村部
4	委員	萩原秀喜	衣笠校区コミュニティ協議会会長	◇市街地・農村部
5	委員	藤城孝行	高松コミュニティ協議会会長	◇農村部
6	委員	山内敏久	泉校区コミュニティ協議会会長	◇農村部
7	委員	杉浦 拡	(H27～) 新町町内会長 田原中部校区在住	◇市街地
9	委員	中神勝彦	(H29) 大久保自治会長 田原南部在住	◇農村部
8	委員	高橋博文	(H29) 山田自治会長 清田校区在住	◇農村部
10	委員	小林孝子	(H25～民生・児童委員) 童浦校区在住	◇農村部
11	委員	小久保由佳	亀山市民館(コミュニティ)主事 亀山在住	◇農村部
12	委員	荒木真智	(H29) 中山校区まちづくりアドバイザー 赤羽根市民センター長 神戸在住	◇市街地
13	オブザーバー	鈴木 誠	❖愛知大学地域政策学部教授	・コミュニティ政策学会理事

平成29年8月～平成30年3月までの委員

委員 牧野京史(神戸コミュニティ協議会会長)  
柴田陽助(高松コミュニティ協議会会長)  
宮川敏彦(福江校区コミュニティ協議会会長)  
山本晴樹(伊良湖地区コミュニティ協議会会長)

■事務局：田原市総務部総務課(地域行政係) 電話 0531-23-3504 FAX0531-23-0180  
(課長) 鈴木洋充 (主幹) 本多美和 (課長補佐兼係長) 藤井一彦 (主事) 森下将光

平成29年8月～平成30年3月までの事務局  
(課長) 増田直道





田原市地域コミュニティ活性化研究会 検討結果報告書

「地域コミュニティの担い手不足を克服し

活性化を図るための検証」

\*\*\* 平成31年3月 \*\*\*

田原市地域コミュニティ連合会事務局

〒441-3492

愛知県田原市田原町南番場30番地1

(田原市役所総務課内)

TEL 0531 - 23 - 3504 FAX 0531 - 23 - 0180

E-mail komiren@city.tahara.aichi.jp

URL <http://tahara-komiren.com/>